

学術交流協定締結

三重大学教育学部と北京理工大学との間に学術交流協定が締結されました。

北京理工大学訪問記 — 悩みはいつでも同じ —

教育学部長 藤田達生

故宮（紫禁城）をはじめとする歴史の宝庫・北京への訪問は、恥ずかしながら今回が初めてだった。11月15日から二泊三日の強行軍で、故宮からは北西約10kmに位置する北京理工大学を訪ね、学術交流協定の調印をおこなってきた。まずは、大学に関するデータを簡単に紹介しよう。

工学系を中心に、理学、人文社会学を含めた総合大学で、1940年に中国共産党によって設立された最初の理系大学でもある。「211プロジェクト」および「985プロジェクト」に指定されている国家重点大学となっている。国防分野の高級科学技術人材を育成する重要拠点となっており、李鵬、曾慶紅、葉選平などの国家リーダを輩出した。全ての学院に博士過程を設置している。

(https://www.spc.jst.go.jp/education/university/univ_007.html)

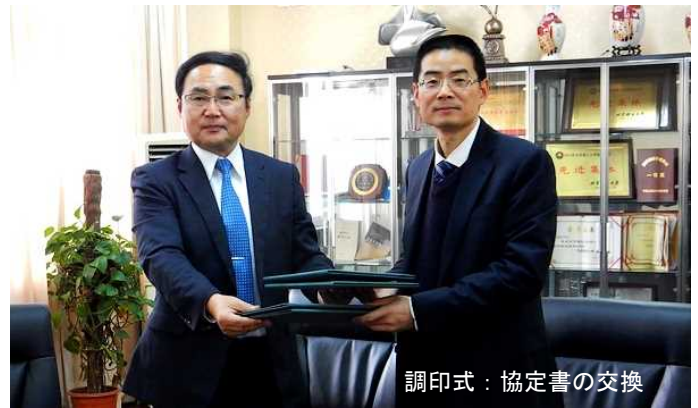
あらかじめ、例年集中講義をおこなってきた馬原潤二先生からレクチャーいただいていたが、北京理工大学を訪問して担当の先生方と懇談した結果、上記の紹介文通りの研究大学としての印象を強くもった。毎年訪問する天津師範大学が、教育中心のイメージを強く打ち出しているのとは対照的である。

私たちをご案内くださったのが、李建華先生（外国語学院日語系副教授・博士）だった。日本近代思想史を専攻する先生は、近代日本の政治外交史、政治思想史を専門とする名古屋大学名誉教授川田稔先生のお弟子さんだった。私も日本史を専攻することから、また川田先生のご著書にも目を通していたことから話が随分弾んだ。

席席で積極的にお話しいただいたのが、周晨亮先生（外国語学院日語系主任・副教授・博士）である。先生のお父君が著名な中国史学者であること、ご自身の東京工業大学への留学時代の苦労話など、流ちょうな日本語によるウイットに富んだお話しが、大変魅力的だった。

お二人とも、日本の大学で博士号を取得されているのには驚いたが、同僚も皆同じだということで、改めて大学のレベルの高さに感心した。二日間に交わされた私たちの会話にはいくつかの共通テーマがあったので、そのひとつをご紹介します。

お二人の先生が特に気にされていたのが、本年6月8日付で下村博文文部科学大臣（当時）が、全国の国立大学法人に対して、教員養成系や人文・社会科学系すなわち文系の学部・大学院の廃止や転換に積極的に取り組むことを求める通知を出した



調印式：協定書の交換

ことだった。先生方の情報収集力に驚くのと同時に、目の付け所の鋭さにも舌を巻いた。

文系学部とりわけ文学部が対象とする哲学・歴史学・文学という研究領域は、過去を振り返る基礎学問である。人類は、現状を改善し未来をめざす理系の応用学問のみに依存してきたのではない。我々の将来は、深い内省と高い倫理によって方向付けられるべきである。これを軽視する国家は、その品格が問われ、国際的な信用は得られないだろう。

このような愚見に対して、お二人は賛同されつつも、これは日本のみならず中国の問題でもあると仰る。日本がこのような方針を採ったことに中国政府も追随するかもしれない、理系中心の北京理工大学では、ますますその傾向が強まることを危惧されるのである。ここで、あらためて私は国家を越えた文系学問の危機を実感した。そうなのである。日本の選択は、アジアの選択でもあるのだ。

本学と北京理工大学の交流は、研究者交流が中心である。具体的には、相手先大学で二週間程度の授業をおこなうことであるが、交流を通じて研究者としての悩みを共有することになるのではないかと予想した。怖くもあり、楽しみでもあり...、である。私も、お役ご免になったら授業に臨みたいと、今から楽しみにしている。

最後に、ご同行のうえ細やかな心配りをいただいた宮岡邦任先生（国際交流委員長）と馬原先生には、あらためて感謝申し上げます。

外国人教員特別講義

9月27日から約2ヶ月間「外国人短期招聘プログラム」に基づき、Auckland 大学より Farrell Cleary 先生をお迎えし、いくつかの授業で特別講義を行って頂きました。

「教育課程論Ⅱ」に Farrell Cleary 講師を迎えて

学校教育講座 教授 佐藤年明

私が後期に2コマ開講している「教育課程論Ⅱ」は、中学校・高等学校免許取得希望者を対象とする教職科目です。昨年度からは東日本大震災に学ぶことをサブテーマとして中等教育課程についての学習活動を組織しています。

一方、私は、2012年以来本学部主催のAuckland 大学教育研修に参加してきており、この中で昨年9月にAuckland 大学で本学部研修団への講義を担当された Farrell Cleary 先生に出会

いました。日本語も交えながらわかりやすくお話しされる Cleary 先生にとっても親しみを覚え、10月に来学される折にはぜひ私の「教育課程論Ⅱ」でもゲスト講義をしていただきたいとお願いしました。

昨年度後期「教育課程論Ⅱ」では、11/21（金）に5コマ授業で、11/28（金）に3コマ授業で Cleary 講師の特別講義をお願いしました。講義のテーマは、以下の2項目です。

1. Language education: bi-cultural and multi-cultural issues
2. Surviving after the Earthquake - Christchurch schools -



講義中の Cleary 先生

第1項目は New Zealand の学校教育の紹介です。Cleary 先生の専門である language education を中心に、また中等教育に焦点を当てて話していただきました。第2項目は私の授業のサブテーマとの関係で、東日本大震災の1ヶ月前に New Zealand で発生した大地震と、それが Christchurch の学校教育に与えた影響について話していただきました。

この時は1つの授業について1回ずつの講義でしたので、講義終了後に受講生に感想レポートを書かせて、それを事後に Cleary 先生にお届けすることに終わりました。

今年度再び本学部に Cleary 先生を迎えると知り、同じく私の「教育課程論Ⅱ」で特別講義をお願いすることにしましたが、その際 Cleary 先生のご負担を増やすことになり、申し訳ないと思いつつ、2つの講義それぞれで講義の回と Q&A の回の各2回、計4回の講義をお願いできないかと依頼しました。昨年度の経験から、講義の後に質問時間を取ってもすぐにはなかなか発言がなく、また後からの感想レポートではもっと聞きたかったこともいろいろと出されるけれどももうそれを伺う機会がなかったため、授業中での Cleary 先生と学生のやり取りをもっと行えるようにするために各2回という設定にしたいと考えたのです。

Cleary 先生は私の厚かましい申し出を快く受けて下さいました。感謝しています。ただ、私の講義は金曜3コマと5コマ、そして Cleary 先生は金曜4コマに英語教育コースの授業を担当されています。金曜午後に3つの授業を連続、それを2週連続というのはやはりハードすぎるということで、10/30: 3コマ講義、11/6: 5コマ講義、11/13: 3コマ Q&A、11/27: 5コマ Q&A というスケジュールを組みました。大学祭を挟んで延べ5週間に及ぶ授業日程となりました。

講義内容は、昨年度と同じ2つの項目ですが、動画資料等はより新しいものに更新して下さいました。

今年度私が画期的だったと思うことは、(これは Cleary 先生からのご提案を受けて実現したことなのですが) 講義と Q&A 実施にあたって2つの授業の受講生に対してボランティアを募り、授業に先立って Cleary 先生のオフィスでミーティングを行ったことです。

Cleary 先生は、昨年度も今年度も、講義の大半を日本語で行われるくらい日本語が堪能なのですが、講義を受けて受講生が提出する日本語のレポートを読んで次の回の Q&A を独力で準備することはさすがに難しいと判断され、その作業のためにレポートの内容を口頭で英訳してくれるボランティアを募りたいと提案されました。さらに、そのミーティングをそれぞれのコマの1回目の講義の後だけでなく、講義の前にも有志の学生

に集ってもらいディスカッションすることで、講義内容をより学生の関心に近づけたいとのことでした。

私の講義の受講生のうち英語教育コースの学生の中には、9月の Auckland 大学教育研修に参加した人もおり、そうでなくても10月の Cleary 先生来学以来英語教育コースの授業で先生と知りあっている学生がいるので、彼らが提案に応じてくれるだろう、しかし英語教育コース以外の学生も歓迎だと Cleary 先生はおっしゃいました。

私は20数年続けてきた教育課程論 I / II の講義の中で、全受講生への活動提起ではなくボランティアを募って役割を果たしてもらうことをこれまで一度もやったことがありませんでした。ですから、Cleary 先生の提案に賛同しながらも、正直何人の学生が集まってくれるだろうかと半信半疑でした。

しかし実際には、予想を超えて多くの学生が集まってくれました。結果的にはミーティングは2つのコマを合わせて3回開かれました。私はどの回も数分顔を出すことができただけですぐに所用で退出したため、正確な参加者数は把握できていないのですが、2つのコマを合わせて10人を超える学生が集まってくれていたと思います。

このミーティングを経て、Cleary 先生が3コマ68名、5コマ42名の質問の中から回答するものを選ばれました。

3コマの Q&A の回ではあらかじめ先生が回答される予定の質問項目を授業通信 CURRICULUM PLAZA に載せておきました。



パワーポイントを使って講義される Cleary 先生

5コマの Q&A の回では、授業の直前に私が所用で休暇を取っていたため Cleary 先生との事前の打ち合わせができず、授業通信への質問項目掲載はできませんでした。

Q&A の授業では、moodle に投稿された質問に私が予め通し番号を振っておき、それをプロジェクターで提示して質問を出した本人に読み上げてもらい(欠席の場合は私が代読)、その後 Cleary 先生に質問に答えていただきました。

文字通り授業のリアルタイムでの学生と Cleary 先生のやり取りを実現するには至りませんでした。質問に答えていただくことによって講義内容の理解を深めることはできたと思います。

毎年10名強の教育学部生が Auckland 大学教育研修に参加して貴重な学習経験をしています。彼らは教育学部生全体から見ればごく一部に過ぎませんが、今後さらに Auckland での学習を体験する学生が増えることを期待するとともに、Auckland 大学関係者に本学において学生の学習機会を作っていただくことが増えていくこと、またそうした時に今回のように Auckland 大学教育研修経験者が力を発揮し、それによって Auckland 研修の成果を他の学生たちにも還元していただけることを期待したいと思います。

オークランド大学教育研修

第5回オークランド大学教育研修が8月31日～9月10日に実施されました。参加学生は12名で、4人の引率教員のもと、多くのことを学んで無事に帰国しました。

オークランドでの出会い

みなさんは教育や授業と聞いて何を思い出しますか？机、教科書、黒板などを想像されたかもしれません。日本の教育では、

人間発達科学コース4年 藪本明希

先生が前に立って黒板とチョークを用いて行う一斉授業が主流です。私は今回の研修に参加するまで、海外の教育制度について

てあまり知識がなく、海外でも同じような授業が行われているのだろうと思っていました。しかし、ニュージーランドで過ごした11日間はそんな私の世界を変えました。



国語の時間の子どもたちと子どもたちの作品

研修では、日本と制度は異なりますが幼稚園、小学校、中学校、高等学校、大学の授業に参加と見学をさせていただきました。私のニュージーランドの教育、授業の印象を一言でいうと「自由」です。私が「自由」だと感じたことについて紹介します。

まず、授業スタイルについてです。ニュージーランドでは教科書はなく、自由な席で自由な学習を行っていました。教室の前で先生が5人の子どもたちに授業しているかと思えば、後ろではパソコンを使って調べ学習をしている子やおやつを食べている子もいました。また、先生はずっと立っているのではなく、椅子や床に座りながら子どもたちの視線に近い体勢で授業を行っていました。私が一番驚いたのは、訪問した小学校で子どもたちが自由に時間割を作っていたことです。主要教科は最初に組まれており、1日3時間分は自分で勉強したい教科や足りな

いと思う教科を学習することができるのです。このことから、ニュージーランドの子どもたちは受動的ではなく自分から学んでいくという主体性、パソコンやタブレットを自分たちで取り扱うことで情報活用能力が身につけているのだと感じました。

次に、言語や文化についてです。私のホストマザーはイギリス出身だったり、訪問先の高校では日本人の生徒もいたりしました。このようにニュージーランドは先住民族であるマオリをはじめとして、世界の多くの文化が共存している国です。学校の壁には英語だけでなくマオリ語でも単語が書かれていました。マオリ語だけでなく、子どもたちは進学するにつれて英語やフランス語、日本語などさまざまな言語を学習します。自国の文化を大切にしているだけでなく、多文化についても積極的に学習していることが印象的でした。

最後に、芸術についてです。日本でも教室の壁に子どもの作品を掲示したりしていますが、ニュージーランドでは学校全体に飾られていました。ニュージーランドでは、芸術として制作活動だけでなくダンスなども含んでおり、表現活動に力を入れていることが分かりました。このような活動の充実から、子どもたちの自由な発想力や想像力、表現力が育っているのだと考えられます。

短い期間でしたが、ニュージーランドでの生活は私にたくさんの新しい出会いを与えてくれました。この出会いで学んだことから、私は日本の教育の向上や見直しを考えていく上で、海外の教育制度にも目を向けていく必要があると考えました。国民性や制度の違いによって取り入れにくいものもありますが、良いところを取り入れたり日本の授業でも活かせるように工夫をしたりすることができるのではないのでしょうか。この研修での出会いを胸に、来年の春から教員として子どもたちの世界が広がるような授業を考えていくとともに、自国や他国の文化のよさについても伝えていきたいです。

Tri-U IJSS

第22回 Tri-U IJSS が江蘇大学で開催されました。三重大学からは教育学部生2名を含む13名の学生が参加し、英語で研究発表を行いました。

中国での Tri-U プログラムに参加して — アジアの中の日本 —

教育学研究科人文・社会系教育領域 1年 長岡久美

10月18日から23日までの6日間、中国の江蘇大学にて「Tri-U 国際ジョイントセミナー&シンポジウム2015 Tri-U プログラム」に参加した。アジアの四大学として三重大学、中国の江蘇大学、タイのチェンマイ大学、そしてインドネシアのボゴール農科大学が中心となり、今年度で22回目を向かえた国際交流プログラムだ。毎年アジア各国の学生が決められた中から1つのテーマを選び、自分の論文を発表する。今年度のテーマは、人口、食物、エネルギー、環境、高等教育の国際化であった。三重大学からは13名の学生が参加した。

私は英語での論文発表という学びに加えて、アジアの若い学生達が何に関心があるのかに興味があり、参加した。大学院生であり、かつ現職教員でもある立場として、この体験を今後高校に戻った時に生徒に還元したいという思いもあった。

このプログラムはたった6日間であったが、非常に充実した内容で自分の凝り固まった頭をほぐし、柔軟に対応せざるを得ない体験であった。

江蘇大学は、大都市上海と南京の間にあり、上海浦東国際空港からバスで4時間のところにある。1日目は、中部国際空港を出発し、江蘇大学に着いたのは夕方遅く6時頃であった。その後、Get-together Partyがあり、そこで江蘇大学の留学生と各国の参加者のパフォーマンスが披露された。また2日目に、Welcome Party、最終日はFarewell Partyと多くのもてなしを受けた。そして、アジア各国の民族衣装とその踊りに圧倒された。私たち三重大学チームも、この最後のパーティーに向け



送別会での出し物「かぐや姫」劇の本番前

て日本で準備をした。かぐや姫の三重大バージョンの劇を作り、その中で空手やドラえもんの演出を考えた。アジアの学生の目には、日本の文化はどのように映るのかをじっくり話しあった。本番で私たちの劇を暖かく受け入れてもらったのは、うれしい限りであった。

この Tri-U プログラムの本題である論文発表は、2日目と3日目に各テーマに分かれて発表された。この発表のための準備や練習では、三重大の集中講義やリハーサルを通して先生方にたいへんお世話になった。8月の中旬からかなりの時間をかけ、出発直前まで論文発表のリハーサルに力を注いだ。三重大学チームは論文発表において十分練習の成果を発揮できたと思う。

私たちは、いかにわかりやすく聴衆に訴えるかに注意をした。しかし、質問の時間が厳しかった。質問の英語のスピードが早く、さらにアジア各国の英語のなまりもあるので聞き取れない。また、私達のなまりもあるのでうまく伝えることができない。流暢さという点では、中国やインドネシアの学生はかなり話すことに慣れていて、一方、私は「高等教育の国際化」のテーマを中心に発表を聴いた。アジアの大学間における国際交流研修プログラムの開発や大学での研究に必要な英語力の育成プログラムなどの内容は、各国共通の問題が見られ共感する部分が多かった。

このプログラムでのもうひとつの大きな学びがワークショップだ。これは、四カ国の学生混合チームが作られ、各チームで一つテーマを選び、その問題の解決策を発表するというものであった。私のグループは水質汚染のテーマを選んだ。インドネシアにある植物が水中の汚染物質を浄化する作用があるという論文のアイデアをもとに、セメント工場の水質汚染解決の提案を発表した。このチームでの議論では、物理の数式が使われたり、その水質汚染に関する化学の知識が必要になったりと、私の持っている知識で議論するにはかなり集中力を必要とした。ワークショップのために大学に深夜まで残り、夢中になって議論したのは忘れがたい思い出となるだろう。

アジアの学生とのワークショップで感じたのは議論の仕方の違いだ。日本では、意見を考えてから発言する傾向があるとよ

く言われるが、考えながらどんどん発言するというアジアの学生の姿には迫力があつた。また、環境汚染に関する関心度が彼らは非常に高く、自分たちの目の前の課題であるというひたむきさが伝わってきた。チームの学生たちに将来の夢を聞くと、研究者になりたいという意見が多く、意識の高さを感じた。

また、この大学に参加している学生たちは全体としては、相手を尊重してコミュニケーションをとろうという姿勢が見られた。宿泊のホテルでは英語がまったく通じなかった状況と大学進学率のことも考え合わせると、このプログラムの学生達は特に国際交流への意識が高く、非常に積極的であることを改めて実感した。自分の専門とは異なる研究分野でこのような学生達と議論できたことは自分の中の情性を砕く活力となった。

4日目は、お茶や農業の庭園見学ツアーであった。この日以外は観光はほとんどできなく、また中国に少し滞在したことでますます中国の他の地域を見たい気持ちが強くなった。

このプログラムを通してアジアの他の国の人と触れ、共に話すということは、予想以上に自分の中の何かが変わった感じがする。そして、今回の研修を通して自分の国の文化について考え、いくつかの小さな発見があつた。日本はアジアの国の中の一つの国であるが、共通点よりもむしろ異なる部分に目が行き、それぞれの国の個性の違いや面白さを体験した。コミュニケーションという視点からこのことを生徒たちに伝えたいと思う。

中国で感じた国際交流の意義

英語教育コース4年 荒巻 凌

私は10月18日～23日にかけて中国で開催された第22回Tri-U国際ジョイントセミナー&シンポジウムに参加した。なぜ私が大半の教育学部生に知られていないだろうこのプロジェクトに参加したかという、「海外に行きたい！海外の人々と友達になりたい！」という思いが強かったからだ。そんな私にとって、アジアの国々の学生や先生が一堂に会するTri-Uというプロジェクトはまさに絶好の機会であったのだ。中国江蘇省の鎮江という街にある江蘇大学へ到着すると、とにかく驚きの連続だった。最初に驚いたのは江蘇大学の大きさである。三重大学も国立大学の中では有数の広さを誇っているが、江蘇大学ははるかに広く、キャンパス内には移動用のスクールバスがあつた。街を歩けば車はもちろん、電動スクーターのクラクションが鳴り響いており、はるか前方のスクーターの運転手がクラクションを鳴らしてきたときは、さすがに日本語でツッコミをした。Tri-U期間中で一番驚いたことは参加学生の英語力の高さである。特に中国、インドネシアの学生たちは自信を持って英語を話し、論文発表の場においても質問者の英語を的確に聞き取り、自分の意見を述べていた。

このTri-Uというプロジェクトに参加して嬉しいことがたくさんあつた。一つ目に三重大学から参加した学生たちと親しくなることができたということだ。メンバーのほとんどが生物資源学部生ということもあり、当初はアウェイだなと感じることが多かった。Tri-Uの期間中に日本の文化を紹介するための出し物をするということで、夏休みに集まって話し合いを重ね、何度も出し物の練習をした。自然と仲も深まり徐々に自分のポジションを確立していった（完全にお調子者キャラだったが）。二つ目に当初からの希望であつた、海外の友人がたくさんできたということだ。Tri-U期間中は積極的に私から他の参加者に声をかけていったことで、三重大学で一番有名になったのではないかと思う。特に仲良かった2人のタイ人学生と宿泊先のホテル近くの屋台で飲み明かしたのは本当に楽しかった。店員さん



ワークショップのグループメンバーと：左から3人目が荒巻君

は英語を話すことができないので、私たちはジェスチャーと中国語で「冷たいビール」を意味する語句を駆使して注文に挑戦。不思議なもので店員さんに理解してもらえて、結局その屋台には3回も通うこととなった。

どんな活動が国際交流につながるのかというのは一概に言うことはできないかもしれないし、私が中国で体験したことは一個人のちっぽけなものに過ぎない。しかしながら、共通言語としての英語で他国の人々と会話することはもちろん、Tri-U参加学生がそれぞれの国の言葉を英語で教え合うことは表面的かもしれないが、それぞれの国に興味を持つ第一歩となるだろう。私自身今度はタイやインドネシアに行ってみたいという気持ちが芽生え、実現可能か分からないが、タイへの一人旅を計画している。6日間という短い期間ではあつたが、その中でもものすごく濃い経験をさせていただき、中国へ旅立つ前に私をサポートしてくださった方々、そして現地でお世話になった人々に改めて感謝したい。この貴重な経験を大学時代の良い思い出として終わらすのではなく、来年インドネシアで開催される第23回Tri-U国際ジョイントセミナー&シンポジウムに教育学部から多くの学生が参加してもらえるように協力していくとともに、来年以降の教員生活に存分に生かしていきたい。